



ビーダーマイアー・フォアメルツ時代の文芸サロン：  
アネッテ・フォン・ドロステ-ヒュルスホッフの関わりと隔たり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ドリンガー, ペトラ, 岩元, 修 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009984">https://doi.org/10.24729/00009984</a>

テキスト

Petra Dollinger : *Literarische Salons der Biedermeier- und Vormärzzeit — Beteiligung und Distanzierung der Amette von Droste-Hülshoff*. In : *Dialog mit der Droste*. Hrsg. von Ernst Ribbat. Paderborn, München, Wien und Zürich 1998, S.39–69.

たレーヴィン・シュッキングも、レベルに達しなかった。大きめのサークルでの陰謀や社交上の策動はドロステを疲れさせた。自己目的としての社交界は彼女にはぞっとするものだった。その限りでは、ビーダーマイアー期の小さく快適な(表面的には素朴であるが、内面的には精神的に要求が高く、誠実で、真実で、心のこもったものであった)文芸的「お茶会(ティーテーブル)」という、ドイツ教養市民のサロン形式は、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフにとっては、まさに相応しいものであった。しかし「大きな社交界(パーティー)」のサロンは、精神的内容や心情的内容よりも、栄光と体裁の方に走ったものであり、ドロステには合わなかったのである。

志を同じくする女性との同時代的な交友や友情に勝るとも劣らぬほど、ドロステにとって重要であったのは、時間と空間を横断して、興味深い精神や魂からなる、観念上のサロンであった。ヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンとヨハンナおよびアデーレ・ショーペンハウアーのおかげで、彼女は古典主義のヴァイマール、イエーナとドレーズデン、ゲーテとシラー、ノヴァーリス、ケルナー一家、クライストと接触することができた。彼女が成人の闕に達するまでは母の検閲のもとにあった、あの偉大な文学が、今や友人の物語の中から、作品を創作した人物そのものの姿を帯びて、いきいきと彼女のほうへ向かってきたのである。ジビュレ・メルテンスと彼女のサークルを通じて、彼女はドイツ中世、古典古代への関心と、イタリアへの憧れを深めた。エリーゼ・リュウディガーの仲介によって、彼女はビーダーマイアー期のベルリンの精神的世界、ラーエル・レーヴィン・ファルンハーゲン、ハインリッヒ・ハイネ、ベッティーンネ・フォン・アルニムなどに接触した。時代を超えた「目に見えぬサロン」というこの広がり、少なくとも、内面へ向かうアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフにとっては、同時代の詩人との個人的な(現実の)接触や、サロンあるいは友人のティーテーブルに現れた、その他の有名著名の人々との個人的な接触と変わらぬほどに、重要であったのだ。

(本論文には膨大な註が添えられているが、頁数の都合上、その翻訳は掲載できなかった。)

関係における、退屈でぐったりするような義務的な訪問とは反対に、彼女の友人のサロンは自由な社交を具現し、それは望むときには参加することができ、しかしまた行かなくてもよいものであった。ドロステがそのときおしゃべりで、明るく、機知に富んでいて、魅力的であり、逸話や物語を名人のように物語ったということは、証明されている。サロンは彼女にとっては、精神の自由と社会的同権の場であり、そこで彼女は、数時間は、男爵令嬢、娘、姉妹、叔母、従姉妹、姪などというような、貴族のおよび家族的な機能を果たすべき自己の存在性から解放されたのである。サロンの中にドロステは、友人にして心情を同じくする者、賢明な会話のパートナーにして愉快的変わり者を求め、見出した。詩人は自分の世間のミクロコスモスのなかで、人間についての情報と経験を蒐集するのを好み、とりわけ、選ばれた、深い、親密な人間関係、友情、愛を集めた。彼女はその中で——極めて精選されたやり方ではあるが——サロニエールの基本タイプと一致したのである、彼女は決してサロニエールではなかったにも拘らず。もちろん他人からただ「見物」されるだけになることを、恐れざるをえないときには、彼女は斜に構えるか、もしくは社交界から離れていた。

我々がスケッチしてきたサロンの意義は、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフにとっては少なからぬものであったが、しかしまた過大評価されてもならないのである。なぜならば、彼女は、詩人として、作家として、全く自立した孤独な天才であり、まわりの者が往々にして見せる無理解にも拘らず、あるいはまさにその無理解のゆえに、自分の価値をよく意識していたからである。なるほど彼女もまた時代の社交的精神文化に属していた。しかし彼女は究極的には内面に向かった人格を持ち、その人格が、彼女の心理学と精神文化を、なによりも内面から掬い出したのである。彼女は個人主義者であり孤軍奮闘する者であった。しかしその点においても、いやまさにその点で、彼女は時代の未来を指し示す代表的人物であったのだ。詩人論議、批評、「(作品)修正の提案」は、彼女にとっては問題であり危険であった。なぜなら詩人としての彼女の水準に達する者は、友人にはひとりもいなかったからである。彼女を「訂正」したがっ

ドロステが頻繁にメーアスブルクに滞在するようになり、ユンクマンとシュッキングがミュンスターを去ってからは、このサークルは解体した。内輪もめもまたこのサークルの終焉（一八四二年頃）を早めた。それは部分的にはボルンシュテットに原因があったのであるが。しかし個々の原因が何であれ、このような緩やかな結びつきの殆どがきわめて短命であることは、その本質に属することであつたし、今でもそうであるのだ。エリーゼ・リューディガーが一八四五年の秋、夫のミンデンへの転属のためミュンスターを去った時、ドロステはきわめて批判的な回顧を行った。彼女は一八四五年七月二十九日エリーゼ・リューディガーに宛てて、「私の来年の（ミンデン）訪問の時には、ほんとうに愛すべきサークルの中にいるあなたと出会えるであろうことに、私は賭けます。たぶんそのサークルはあなたに快適なものをもたらすでしょう。そして望むらくは、ミュンスターのサークルのように、幾重にも張りつめて分裂してしまうものをもたらしませんように。」と申しますのも、愛する人よ、あのサークルはやはりただ遠くから見れば良かったのです。書き割りの後ろはどことも痛々しく見えましたから」と書いたのである。

ドロステが計画したミンデン訪問はもちろん、ドロステの病気が原因となつて、もはや実現しなかったが、しかし一八四六年の初夏、逆にエリーゼ・リューディガーがミンデンから数週間リュッシュハウスを訪問した。それから数ヶ月後ドロステはボーデン湖への最後の旅に出た。二人の友は二度と会うことはなかった。しかしエリーゼ・リューディガーは、アネット・フォン・ドロステ・ヒュルスホッフの死後も、ずっと真の友であり続けた。彼女はドロステの作品と死後の名声を広げるのに、力の限り努力したのである。

アネット・フォン・ドロステ・ヒュルスホッフのサロン社交への関わりについて総括的に言えることは、彼女は、健康が許し、客たちが気に入ったならば、喜んで参加したということである。見わたしのきかないほど大きな母親の親類

私に代わってそれをこきおろす鈍重な舌のことを思うと、

私はメカジキのように穴を穿って、雨しぶきの中へ突進したくなる。

一幕ものの喜劇『ペルデュー』（一八四〇）のなかで、ドロステは、「ヘッケン作家協会」に酷似した文芸サロンにおける、いつになく興奮した夕べを茶化している。「……」空気は、精神と機知の火花の前でかなり震えていた「……」。今夜と違って、他の晩はどうして「絶えられないほど退屈」になることが多いのでしょうか、という問いに対して、「そうさ！人間は気分屈伏しないかね？——魂はときには居眠りをするものさ、とくに（からかうように小声で）アモールがもはや起こしてくれないときにはね」という答が返される。実際、若いシュッキングは文芸クラブの女友達に、多かれ少なかれ戯れるように言い寄った。（彼の側から見て）最も深刻になったのは、二才年上の人妻エリーゼ・リューディガーとの関係であった。彼女も、はるか年上のアネット・フォン・ドロステ・ヒュルスホッフと同様、この若い男の魅力から逃れ難かったのだ。しかし友人アネットの助けにより、最後の瞬間に「非常ブレーキ」をかけることができたのである。

「ヘッケン作家協会」は華やかな数年間を送り、またレーヴィン・シュッキングを介して、その友フェルディナント・フライリッヒラート（一八一〇—一八七六）との結びつきも得た。彼の『絵のようでロマンティックなヴェストファーレン』にドロステは匿名で寄稿した。ドロステと、フライリッヒラートならびに作家のマティルデ・フランツィスカ・フォン・タビヨーアンネケとの個人的なコンタクトは実現しなかった。この女性作家は数年間ミュンスターに住み、おそらく一度か二度はリューディガーのサロンに現れもしたであろうし、また彼女の年鑑と年報には、ドロステやリューディガー・サークルの他のメンバーも自由に投稿できたのであったが。

このサークルではメンバー自身の作品も紹介され議論された。アネットの詩『ティーテーブル』の中では明るい風刺でこう言われている。

「……」麗しき精神の持ちぬしが、原稿を

ポケットのなかにきれいに畳んだまま、

聞き耳を立て、言葉の波の中で

舵を自分がつかんでやろうと、窺っている、

お上品な手が輝く棒で

編み物をしているのが聞こえ、

紳士がたは姿勢を正してご立派に

叡知のぴかぴかの箔を広げている。「……」

『捕鳥小屋』の詩のなかでもアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは文芸サロンのことを当てこすっている。作中、本来ならとくにサロンに到着しているはずの詩人が、驟雨のために森の小屋に閉じこめられて嘆いている。

あの明るい部屋のこと、やわらかいソファァーのことを思うと、

そして私の詩、あの私の詩が、あそこのお茶の席で読まれてずたずたになるのを考えると

嘆に値する女性的性格の人物」の一人であり——「真に抒情的な天性、心情、まことの熱狂が、彼女の中では、狡猾さ、見せかけの芝居、全ての人を互いにけしかけるのを好む陰謀の精神と、一つになっていた。彼女は養鯉池の川カマス（肉食魚）であった「……」と書いている。そうはいつでも、デュッセルドルフへの旅の途上、かつてミュンスターに住んでいたカルル・インマーマンを訪問して、そのとき彼がドロステとユンクマンの詩を知らないということを確認すると、そのあと彼にそれらを読むようにしむけたのは、ボルンシュテットであったのだ。

ドロステは、このサークルにおいてはホステスその人と並んで、その（ホステスの）叔母であり賢明で愛すべき老嬢のヘンリエッテ・フォン・ハクストハウゼンを誰よりも高く評価している。彼女のことはすでに「イットヒェン叔母さん」として言及した。興味深いのは、レーヴィン・シュッキング（一八一四—一八八三）について、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフが行った初期の頃の性格付けである。なるほど彼は詩人としては成功しないままであったが、批評家としては次第に新聞で名を知られてきていた。ドロステは次のように報告しているが、当時はまだきわめて醒めていたのだ。

「……」彼は疑いもなく我々の小さなクラブでもっとも繊細な判断力を持っています。これほど鋭く適切に判断できる人が、これほど凡庸に書くことができるということも稀です。——彼は私にしばしば「アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・」シュレーゲルを思い出させます。たいへん機知に富んでいて、とびっきり愛想がよいのですが、しかしやっぱりきわめて虚栄心が強く、うぬぼれ屋で、軽薄ですので、彼に対して公正であろうとすると私は疲れてしまいます「……」。



支店のようなものとして、ひとつの作家クラブである、いわゆる「ヘッケン（孵化する卵、雛鳥）作家協会」も形成された。ドロステもミュンスターにいたるときは参加した。ミュンスターにおけるエリーゼ・リューディガーの文芸サークルについて、アネット・フォン・ドロステ・ヒュルスホッフは一八三九年の一月末、姉のジェニーに宛てて「……」ミュンスターでは、リューディガー顧問（非常に気だてが良くて控え目な「すなわち無理な要求をしない」夫人で、有名なエリーゼ・フォン・ホーエンハウゼンの娘）のもとに、作家の卵の小さなクラブができており、日曜の晩ごとにそこに集まって、議論したり互いに批評しあったりしています「……」と書いている。

レーヴィン・シュッキングは、このクラブの推進力でさえあったのだが、のちに、小さな「文学的に活発な人々のサークル」について話している。このサークルは「インマーマンや、アレクサンダー・フォン・シュテルンベルクや、ハーン伯爵夫人の初期のまだ世俗的でまだ機知に富んでいた小説などを取り扱い、さらにはサンドやバルザックにはもっと興奮した。」そして文学の受容と生産が同程度に行われている。

朗読者としてはこのサークルでは枢密顧問官カルヴァツキが輝いていた。彼はその技術をテイクから聴き取り覚えたと言った。「……」抒情的なポエジー、内面の心情のやわらかく憂鬱なポエジーは、一人の若い詩人ヴィルヘルム・ユンクマン（一八一一一八八六）が代表していた。彼はロマン主義とパロディカルな人生観に満ちた、心の豊かな人であった「……」。

ルイーゼ・フォン・ボルンシュテット（一八〇六一一八七〇）はベルリンからの改宗者で、『故郷を持たぬ女の巡礼音楽』という題名の詩集を著しているが、この女性作家のことをシュッキングは、自分がこれまでに出会った中で「最も驚

したから、普段着を着ていました。——階段のところまでエリーゼは急いで追いかけてきて「……」そしてどうか、どうか帰らないでと頼みました「……」と彼女は書いている。しばらく抵抗したあと、誰にも紹介されず且つ発言を控えていてもよいという条件で、やはり詩人は説得されて部屋に入る。アネット・フォン・ドロステはさらに続ける。

「……」こうして私はできるだけ離れて、イットヒェン叔母さんとナニー・シャイベラーの間に腰を落ち着けました——一晩中フランス人に背を向けて、右の方でドイツ語の会話をしました。左の方では彼がフランス語の会話をしていました。——花形は我慢できなくなりました！突然彼は相手をしていたご婦人方を座らせて、爆弾みたくに、我々の会話の中へ、危険きわまりないドイツ語をどくどくと流し込みはじめました。——私はまったく不作法をしてやりたい気分になり、彼には必要最低限の答しか返しませんでした。そしていたずら心から、その分いっそう他の人たちみんなには優しくしました「……」。

だがかなり努力したにも拘らず、ドロステは彼を追い払うのに成功しなかった。意味のない恭しさに慣れてしまっているのも、この「思いつきの強い」世慣れた男は、寡黙になっている詩人のことを、なんと、興味深くて畏敬の念を起させる存在だと思ったのだ。アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフに関する彼の後からの評価は、彼女の楽しげな報告によると、「私は『優れた真の女性』で、『女王の気高い雰囲気』を持っていて、（聞いて！聞いて！）服装には『優れた趣味の簡素さ』があり、総じて『彼がこれまでに出会った中で、もっとも感じのよい、興味深い女性』であるのだ。そうよ「……」というものであった。

リュウディガー家における定期的な歓迎の日のかたわらで、サロンの周辺ではよくあることだが、いわば枝分かれの

エリーゼ・リューディガーのサロンの場合でも、ドロステは社交的な才能を持っているにも拘らず、大きな社交界よりも小さく親密な友人のサークルの方に快さを感じたということが、再び観察できる。おりにふれ、しかし特にきわめて小さいサークルのなかで、彼女は「きわめて輝かしいおはなし(エンターテインメント)の才能」を見せるのであった。エリーゼ・リューディガー自らが次のように書いている。

彼女の記憶は、現実の出来事と細かな特徴についての汲めども尽きぬ泉であった。彼女はそれらを湧き出る機知と、真にドラマティックな迫真性をもって物語った。彼女は口頭の物語においても、詩におけるのと同じように、特徴的なびったりの表現をつねに自由に操ることができた。「……」もっとも成功したのは、民衆の生活の描写であった。それを彼女は至る所で観察して、つねに特徴的なアクセントで再現することができたのであった。ふるさとの誠実な低地ドイツ語は、彼女の口にもぼって特別な魅力を獲得した。しかしケルンや南ドイツの方言も彼女はそれに劣らず流暢に話したのである。

リューディガー・サロンの貴重な描写を、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフ自らが、一八四二年十二月二十九日付けのレーヴィン・シュッキング宛の手紙で提供してくれている。予期せずして彼女はエリーゼ・リューディガーの大きめのパーティーに来てしまった。そこには他の人とならんでフランス人文士、ムシュー・シェルイもいた。彼はハッツフェルトという侯爵の王子傅育官で、のちにはデュッセルドルフでプロイセン王子フリードリッヒの息子たちの傅育官を勤めることになるのだが、有名な社交界の花形であった。ドロステは彼を好まなかった。「私はエリーゼと叔母さんのイットヒェンとともに快適な数時間を過ごすつもりでいました。まだそのときは雨が降ってぬかるんでいま

年までベルリンで文芸サロンを営んでいた。そのため、全く若くしてすでにエリーゼ・リューディガーは、文芸的シーンの注意深い観察者であった。当時のエリーゼ・リューディガーが知り合いになったのは、とりわけラーエル・ファルンハーゲンとベッティーナ・フォン・アルニム、アーダルベルト・フォン・シャミッツ、フリードリッヒ・フォン・ラ・モッターフェー男爵、そしてわけてもハインリッヒ・ハイネであった。ハイネを母は引き立てていたのだ。母は若きハイネを「バイロンの相続人」と呼んだが、彼女はスコットとバイロンの作品の翻訳者として、そのような権限を持っていたのだ。ドロステは、ヴィルヘルミーネ・フォン・テイルマンとヨハンナおよびアデーレ・シヨーペンハウアーを通して、古典主義のヴァイマルの生活について聞き知っていたが、いままたエリーゼ・リューディガーのこのような物語を通して、ビーダーマイアー時代のベルリンのサロン世界にも近づくことができたのである。

ミンスターのエリーゼ・リューディガーのサロンで互いに交流し合っていた人々の名を挙げよう。クリストフ・ベルンハルト・シュリユーターとその家族、レーヴィン・シュツキング、リューディガーの叔母で作家のヘンリエッテ・フォン・ホーエンハウゼン（一七八一―一八四三）、上級地方裁判所長のカルル・アウグスト・フェルディナント・フォン・シャイブラー（一七七九―一八四八）とその娘で音楽の天分のあったナニー（一八一〇―一八七一）、将軍の妻で旧姓をフォン・カムツィといったヘンリエッテ・ブリュール伯爵夫人（一八〇五―一八八三）、上級行政事務官でゲーテ崇拜者のカルル・カルヴァツキ（一七九一―一八六九）、のちに神学教授となったヨーハン・アントーン・レオンハルト・ルターベック（一八一二―一八八二）、法律家で文士のオイゲン・クリストフ・ベンヤミン・フォン・キューンアスト（一八一六―一八六八）、詩人で翻訳家のフリードリッヒ・アードルフ・ルートヴィッヒ・フォン・エインハウゼン（一七九五―一八七二）、彼は鉱山職員で時には郡長や地方三部会のメンバーでもあった、そして公務員の娘ルイーゼ（一八〇八―一八六二）とクララ（一八二〇―一九〇二）のデーリウス姉妹など。

フォン・ドロステーヒュルスホッフは、「(貴族の)婦人クラブは閉じられている、まさに最後の審判の前兆！」と辛辣にコメントしている。まだわずかに残っている「社会(社交界)の破片。ゼンデン家、アッシェベルク家、ケルケリング家。そして寡婦、老修道女、司教座教会参事会員などがよぼよぼと集まって丸くなっている。——コツェブーの喜劇に『尊敬すべき社交界』があるが、その社交界には六十才以下の者は入会が許されず、もし許されたとしても、謹厳実直の、ぽつんとひとりでいる人物だけである。ミュンスターのティーテーブルのまわりのサークルを見るたびに、私はこれを思い浮かべてしまう」と、ドロステは言う。

それに対して、ローテンブルク通りに面したエリーゼ・リュウディガーの住まいで開かれる、文芸お茶会(ティーテーブル)には、若い人々も集った。エリーゼ・リュウディガーその人を、クリストフ・ベルンハルト・シュリューター教授(一八〇一—一八八四)は、まさに理想的なタイプのサロニールだと性格付けて、「……」彼女の近くにいつも快適になる。彼女には、善なるもの、真なるもの、愛すべき人間的なものがあり、つねにそれが新たに人の心を惹きつけて獲得してしまう。彼女の判断はつねに重要で当を得ている。彼女の話の出所は、本でも噂話でもない。彼女は自身の感情と見解から話しているのだ」と言う。もちろんエリーゼ・リュウディガーは、ジビュレ・メルテンスやアデーレ・ショーペンハウアーや、ましてやドロステ自身のようなレベルの、天才的で独創的な素質は持っていなかった。しかしおそらくそれゆえに、彼女が人間的にも文学的にも心から尊敬する詩人(ドロステ)と、たがいによく理解し合えたのであろう。エリーゼ・リュウディガーはほぼドロステの娘であってもおかしくはなかったし、彼女に時には「娘ちゃん」と呼ばれもした。

リュウディガーは若いにも拘らず、拡大した文芸的關係を自由に取り仕切ることができた。彼女の母であり、旧姓をフォン・オックスという作家のエリーゼ・フォン・ホーエンハウゼン(一七八九—一八五七)は、一八二〇年から一八二四

ともに、一八三三年から一八四五年までミュンスターに住んだ。エリーゼ・リューディガーとの友情は、ジビュレ・メルテンスとの間に軋轢があった後、すぐに花開いた。それはおそらくはこの(これから数年間)失われた友人のための一種の代替補償でもあったろう。アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフとサロニエールとの親しい友情の、時間的な(確かに部分的には外的な運命に規定されてはいるが)前後関係(連続性)——最初はヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンと、次はジビュレ・メルテンス・シャーフハウゼンと、最後はエリーゼ・リューディガーとの友情——は、観察に値する。いずれの場合も、その時々サロニエールにして友人との優先的な結びつきは、あらためて次のことを証明する。すなわち、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフにとっては、サロンの社交そのものは一番大事なものでなく(そのような関係なら真のサロン女性はいくら持っても持ちすぎるといふことはほとんどないであろう)、ある種の排他性によって特徴付けられる、親密な心からの友情の結びつき、心の結びつきが重要であったということである。彼女は実際いつの時代にも家族以外のそのような具体的な結びつきを必要としたのである。一八四六年に彼女自身がリュックシュハウスからメーアスブルクに移り住んだ時も、彼女はその地で、自分より二十二才若い、それゆえまる一世代若い、当時二十二才の、文学に関心のあるイギリス人、フィリップ・パーソール(一八二四—一九一七)と、生涯で最後の心からの友情を結んだ。もちろん彼女はサロニエールではなかった。

ドロステがケルンの教会闘争(一八三七—一八四二)の数年間、新教のプロイセン官吏夫人と友情を結んだということ、彼女の偏見のなさと広い地平を証明している。友人のミンナ・フォン・ティールマン、アデーレ・ショーペンハウアー、そしてベーケンドルフ・サークルに属していたアマリエ・ハッセンプフルークは新教の信仰を持っていた。ところで信仰上の寛容さは真のサロン社交の基本原理でもあった。ミュンスターの生え抜き貴族からなる上層階級の社交生活は、プロイセン政府へのボイコット措置として、一八三九年には実際に機能を完全に停止してしまった。アネット・

(一七九七—一八四九)と知り合いになった。アデーレは、当初は嫉妬していたが——彼女はいつも他者の陰に立つというつらい運命を持っていた——、ドロステにとって大切な、おそらく個人的にも文学的にも最も理解ある友人になった。アデーレ・ショーペンハウアーとアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフもまた同年生まれであった。アデーレ・ショーペンハウアーが持っている、一八〇六年以来のヴァイマルについての精確な知識と、ゲーテおよび特にその息子の嫁オットーリエとの親しい関係は、ドロステにとっては、フォン・テイルマン夫人による、古典ヴァイマルの前期数十年に関する物語の、重要な続きであった。アデーレ・ショーペンハウアーは一八四〇年の五、六月にドロステをリュッシュハウスに訪問し、またミュンスターにおいても彼女とともに数日送っている。ミュンスターで彼女(アデーレ)は、エリーゼ・リューディガーとクリストフ・ベルンハルト・シュリューターを中心とするサークルの社交にも参加した。

ここで我々は、ビーダーマイアーとビーダーマイアー後のドイツにおいて、目立ちはないが広がってゆく「サロン」にさっと目を走らせてみよう——空間的・時間的境界を越えて延び広がってゆくネット、個人的な文通による結びつきと友情の密なるネットに。ドロステもこの関係の網に編み込まれている。

リュッシュハウスに隣接した都市であるまさにミュンスターにおいて、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは、母親のような友人ヴィルヘルミーネ・フォン・テイルマンが引越した(一八二〇)後、一八三〇年代の終わり頃になってやっと文学的な関心と活動性を持った親しい友人を再び見出した。一八三七年以来ドロステは自分より十五才若い、一八三七年には二十五才の、フォン・ホーエンハウゼン男爵の令嬢であったエリーゼ・リューディガー(一八一二—一八九九)と友情を持った。彼女は夫であるプロイセン上級参事官カルル・フェルディナント・リューディガーと

スは、彼女たちにウンケルにある自分の「ツェーントホーフ」を自由に使わせた。今やそこでも、ジビュレ・メルテンス自身の社交界と密接に関わりながら、もうひとつの文芸―社交の中心が形成された。

一八二八年と一八三〇、三一年に、かなりの期間ラインラントのジビュレ・メルテンスのもとに滞在したドロステの場合(もっと短い出会いは一八三六、三七年と一八四二年に行われたが)、この文芸的世界とのコンタクトによって、彼女の経験の地平は付加的に拡大した。我々は、これらのサロンサークルにドロステが積極的に関与したのかどうかはもちろん殆ど知らない。ただ分かっているのは、彼女がライン地方の方言を完全にマスターしたということと、知り合った多くの人たちに非常に良い印象を与えたということだけである。例えば詩人のヴィルヘルム・シュメーツや古典学者で芸術識者の詩人マティアス・ヨーゼフ・ドウ・ノエルがそのような人々で、ノエルはアネッテ・フォン・ドロステ―ヒュルスホッフに初めて出会った時からずっと夢中であった。これらのライン地方での出会いは、疑いもなくドロステには価値あるものであった。彼女はジビュレ・メルテンスにエーポス『医者<sup>の</sup>遺言』を献呈したし、彼女の詩の多くには、メルテンスやそのサロンサークルが関心を持っているテーマが響き始める。ライン地方の物語、考古学(古典古代学)、そしてわけでもケルン大聖堂。この大聖堂の修復と完成には、ジビュレ・メルテンスは最初の人々の一人として(一八四一年の中央大聖堂建立協会の設立よりもすでに十年も早く)、並大抵でない関わり方をしていった。「ケルン大聖堂」のテーマは、ドロステの詩『都市と大聖堂』『ケルンのゲルハルト親方』に響き始める。しかしドロステにとってもっとも重要であったのは―ジビュレ・メルテンスのサロンサークルにおいても―同年齢のサロンニエールその人との親密な友情であり、なるほど一八三六年から数年間はひどく陰鬱なものではあったが、一八四三年には結局また回復することになった二人の関係であった。

一八二八年ドロステはジビュレ・メルテンスとの友情のおかげで、彼女の新しい友人アデーレ・シヨーペンハウアー



蒐集家であった。両者ともコインと古美術品、直筆原稿、時計、銅版画を集めていた。ドロステは鉱物も集めていた。一方ジビュレ・メルテンスは(彼女はドロステよりはるかに多くの金を使った)、それらとともに古ドイツの巨匠たちの興味深いコレクションも持っていた。この点にはボアスレー兄弟の影響と手本が感じられる。メルテンスとドロステの友情は、結果として二人のために、当初からその他にも興味深い出会いをもたらした。

一八二五、二六年にはアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフはジビュレ・メルテンスと、ケルンの家でのみ交際したようである。そこではボアスレー兄弟も客人であった。彼らのことはしかしドロステはすでに叔父のヴェルナー・フォン・ハクストハウゼンを通して知っていた。メルテンスはそうしながらも、(ボン近郊の)プリッターズドルフの絵のようなロケーションにある「アウアーホーフ」で、この地方の大きなサロン風の社交界の中心にも立っていたし、一八三二年からはボンの新しい(田園ではない)都会の家においても、多くの客を自分のまわりに集めた。メルテンスをめぐる大きなサークルから、ここで少なくとも名を挙げられるのは、司教座教会参事会員にして芸術品蒐集家の老フェルディナント・フランツ・ヴァルラーフ(一七四八—一八二四)、ボンの教授たちの中からは例えばアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(一七六七—一八四五)、美術史家にして考古学者のエードゥアルト・ダルトン(一七七二—一八四〇)である。

一八二八年以来ジビュレ・メルテンスはさらに、あの哲学者の母である作家のヨハンナ・シヨールペンハウアー(一七六六—一八三八)、そしてわけてもその娘のアデーレ(一七九七—一八四九)と親しくなった。このようにしてジビュレ・メルテンスは、古典主義のヴァイマルやゲーテとその家族との密接な結びつきを持つようになった。ヨハンナ・シヨールペンハウアーは、一八〇六年からヴァイマルに住んでいたのであるが、そこで二十年間一つのサロンを営んでいた。シヨールペンハウアー母娘が一八二九年についてヴァイマルを去り、ラインに移ったとき、ジビュレ・メルテン

にケーニヒスヴィンターに彼女を訪問している——フォン・テイルマン夫人の死のほんの半年前である。フォン・テイルマン夫人との関わりについて、ドロステは一八四三年に友人のエリーゼ・リューディガーに宛てて、「『……』私はあなたにもう一度テイルマン夫人についてきちんと話さなければなりません。——私は彼女のことをとても好きでした、精神形成に関して非常に多くのことを彼女に負っています。しかし誰もが思い出すのは、彼女の後年の、もちろん何年も続いた混乱した気分のことばかりで、彼女が自分をコントロールしていたときには彼女がどんな人であったかは、忘れていきます。少なくとも私の中では、彼女の誠実な思い出は守り続けようと思えます」と要約している。

フォン・テイルマン夫人がミュンスターからコーブレンツへ引越したことによって初めて、ドロステはラインラントへ出向き始めた。そのことはおまけに、叔父のヴェルナー・フォン・ハクストハウゼン夫妻がケルンに、叔父のモーリッツ・フォン・ハクストハウゼン夫妻と従兄弟のクレメンス・フォン・ドロステーヒュルスホッフ夫妻がボンに住んでいることにより、いっそう容易になった。すでに一八二五、二六年のケルン滞在の時に、詩人は(多分一八二五年十月二十日ごろ)、興味深いケルンの都市貴族の女性、旧姓シャーフハウゼンのジビュレ・メルテンス(一七九七—一八五七)と知り合いになった。商人の妻であるこの女性は、裕福で教養が高く、一八二三年以来ケルンで自分のまわりにサロンサークルを築いていた。そのサークルにケルンの行政事務官ヴェルナー・フォン・ハクストハウゼンと妻ベティーも属していた。彼らが一八二五年の終わり頃、ジビュレ・メルテンスとアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフを知り合わせたのである。

アネット・フォン・ドロステとジビュレ・メルテンスは多くの共通点を持っていた。彼女たちは年齢の点ではほんの三週間前後するだけであった。両者とも卓越したピアニストであった。両者とも巧みに絵を描いた。両者とも情熱的な

な裏面と見なされ得るであろう。ノヴァーリスとフォム・シュタイン男爵も鉱員であったのだ。ここで明らかになるのは、「真の」ロマン主義(陳腐なロマン主義ではない)と、そしてなおさらのことピーターマイアーは、しばしば仮定されているよりもはるかに多く、経験主義、「啓蒙主義」、「リアリズム」を内包していたということである。

『サンベルナル峠の宿坊』の成立史はアネット・フォン・ドロステとティールマン一家の友情に特に深く結びついている。將軍の最晩年である一八二四年にティールマン一家はアルプスへの旅を企てた。その旅はサンベルナル峠を越えて最後にはベックスに向かった。この地では、フォン・ティールマン夫人の弟で、有名な地質学者にして氷河研究家のハンス・フォン・シャルパンティエ(一七八六一一八五五)が、一八一三年から死ぬまで製塩所長の職を勤めていた。

またフォン・ティールマン夫人の二番目の弟であるトゥーサン・フォン・シャルパンティエ(一七七九一一八五五)も地質学者であったので——彼は最初はドルトムントで、後にはブリークで鉱山統監として働いた——、ティールマン・サークルではこれらの事柄が話題になることが多かったであろうと、仮定してもよいはずである。一八二八年のある手紙の終わりでドロステはヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンとその娘ユーリエに、自分が今執筆中の『サンベルナル峠の宿坊』にローカルカラーを出すために、もっとたくさん細かいことがらを書いて送ってくれるように頼んでいる。

「あなたの優しいユーリエはすでにゴードスベルクでもととても親切に、あの地方とその修道院についていくつかの(ことがらの)覚えを、私に伝えてくれました[……]」。しかし出発の大騒ぎの中で、ドロステはこれらの覚えを書きとめておくのを忘れてしまい、いまになって、修道院と教会の建築や、救助探査の時の修道僧たちの服装と装備に関する細かいこと、そして雷鳥はそこには棲んでいるかなどを、教えてくれるように頼んだのである。

アネット・フォン・ドロステのティールマン夫人へのコンタクトは一八三〇年代には緩んだものになり、また老夫人は新たな病の一突きでついに永遠に狂ってしまった。それにもかかわらず詩人は友情から、一八四一年の九月二十三日

二二)に、興味を持ったことであろう。しかし遠い国々からの旅の報告にも劣らずドロステにとって興味深かったのは、魂のミクロコスモスの観察であった。レーヴィン・シュッキングはそのドロステ伝において、フォン・ティールマン夫人の精神病の発作に触れながら、「アネットは神秘的な領域に対して、詩的な性質の全般的な感受性を高度に持っているが、この地において、いきいきとした関心を抱きながら、彼女の友人であるティールマン夫人の肉体の苦しみと結びついた、透視者的(clairvoyant)な状態を観察した」と書いている。

ドロステはこのような心理的な境界経験にたいして関心を抱いていたが、自らもこの方向での感受性を持っていて、さらには、目撃者によって繰り返し強調されていることであるが、息もつかせず人を魅了しながら、不可解で超自然的なもの領域のことを物語る才能を持っていた。彼女は当時、のちにミュンスターのシュリューターサークルのメンバーになる作家のカロリーネ・ロンバルト(一八〇二—一八八一)とも知り合いになった。この作家は回顧しながら、「コーブレンツで彼女(ドロステ)は、フォン・ヴィンケ令嬢とともにしばらくフォン・ティールマン將軍夫人の客となっていたのであるが、私たちはほとんど毎日往き来していた。彼女に礼を尽くすために開かれたあらゆるパーティーにも招待された。当時はまだ詩の芸術の栄光は彼女を包んではいなかった。ただ彼女の物語る才能が賛美された」と報告している。カロリーネ・ロンバルトによれば、アネット・フォン・ドロステは、「パーティーを『不安と恐怖に陥れる』すべを心得ていたのだ。

すでに早くから、ヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンおよびその娘ユーリエとドロステとの会話は、繰り返してアルプス、氷河、地質学をめぐるものだった。アネット・フォン・ドロステの(父から受継いだもの)一つでもあるが、地質学と鉱物学に対する大きな関心と、この領域に関する彼女の相当の知識は、この地できつと促進されたことである。きわめて一般的にいえば、地質学と鉱業は、ロマン主義者の有機的かつ生物学的な自然陶醉が持っている、無機的

フォン・テイルマン将軍が一八二〇年にコーブレンツに転属となったときも、二人の友人のコンタクトは途絶えることなく、手紙が交わされ、訪問が計画された。コーブレンツでテイルマン家は、将軍夫人が発作を起こし将軍がしだいに病気がちになるにも拘らず、再び興味深い社交的なサークルをまわりに作った。それに属する人々には、例えば州長官のカルル・フォン・インガースレーベンや、シャルンホルストの息子で、グナイゼナウの娘のひとりと結婚していたヴィルヘルムがいた。フォン・シュタイン男爵もまた、旅の途上、テイルマン家を訪問する機会を逸しはしなかった。一八二〇年の五月に彼は娘のヘンリエッテに宛てて次のように書いている。「コーブレンツではテイルマン将軍と夫人が、美しい家の調度を整えるのに携わっているのを見ました。私は彼らの家で、フォン・インガースレーベン氏、(少将)アスター氏、(ヴィルヘルム・フォン)シャルンホルスト氏「……」と食事をしました」と。のちにプロイセンの王にして皇帝となる若き王子ヴィルヘルムとテイルマンは、一八一九年に夏の公用旅行を共にして以来、いっそう緊密な関係になっていた。テイルマンの伝記作者であるヘルマン・フォン・ペーターズドルフは、二人は「いっそう頻繁に出会ったと報告し、さらに「ヴィルヘルム王子は将軍夫人とも知り合いになり、彼女を尊重するようになった。彼は彼女のサークルで快適に過ごし、その中で刺激と陽気な気分に出会った」と付け加えている。一八二四年十月のフォン・テイルマン将軍の死後、寡婦は、国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世から心のこもった弔意の手紙と一〇〇〇ターラーの恩給を受け取っている。

一八二〇年以来繰り返し計画されていた、コーブレンツのヴィルヘルミーネ・フォン・テイルマンのもとへのドロステの旅は、一八二五年の晩秋になってようやく、ケルンから、実現した。しかしそのために六週間以上延長された。つねに遠方への憧れに満たされていた詩人は、テイルマン一家の一八二四年のスイスへの旅や、一家の知己で将軍にして考古学者であるハインリッヒ・フォン・ミヌトリとその妻ヴォルフアルダイーネのエジプト調査旅行(一八二〇・

フォーム・シュタイン男爵その人、カルル・フォン・クラウゼヴィッツ、教育学者にして歴史家のフリードリッヒ・コー  
ルラウシュ、(新教教会)長老のルートヴィッヒ・ナートルプとアントン・メラール、ミミ・ツー・ザルムーライファーシャ  
イトークラウトハイム侯爵夫人(ガリツィン侯爵夫人令嬢)、かつての義勇軍指揮者アードルフ・フォン・リュッツォウ  
と、その妻でアーレフェルト伯爵令嬢であったエリーゼ、および彼女の友人である若き詩人カルル・インマーマンがい  
る。

特徴的なことに、ドロステにとって重要となったものは、フォン・テイルマン夫人のサロンでの社交そのものでは  
なく、このホステスとの友情、彼女との会話、そして彼女が明らかにアネッテ・フォン・ドロステに物語ったであろう、  
フライブルク、ドレーズデン、イエーナ、ヴァイマルに関する文化史的に重要な彼女の思い出であった。フォン・テ  
イルマン夫人の死後、ドロステはレーヴィン・シュッキング宛ての手紙の中で次のように書いている。「彼女の経験は、生  
活状況ならびに時代状況に関しても、また重要人物との関係に関しても、きわめて注目しに値しかつ広範囲にわたるもの  
でした。以前に彼女はそれらについて多くを私に伝えてくれました。しかしそれを私は利用したくはありません。その  
わけは、それが秘密であるからというのではなく、友人の不幸からポエジーを絞り出すことが、私には残忍なことのよ  
うに思われるからです」と。

ヴィルヘルミーネ・フォン・テイルマンは、若き女性詩人と文学的な事柄について対話し文通するのを明らかに好  
んでいたようであり、アネッテ・フォン・ドロステの若い時期の作品の最初の読者に数えられる。一八一九年の手紙で、  
アネッテ・フォン・ドロステーヒュルスホッフは、姉のジェニーに次のように頼んでくれるよう、(母に)依頼している。  
「もし差し支えなければ、彼女(ジェニー)に(ドロステのエアポスの)ヴァルターの写しについて思い出して欲しい(と言っ  
てください)。テイルマン夫人のために」と。

マン教授宛ての手紙の中で、その人との友情が自分にとって重要な意味を持っている「愛すべき、愛すべき調和のとれた魂」の一つに数えている。

彼女の身分と我々の年齢差(彼女は十分に私の母と言ってもよいくらいです)が私たちを長いあいだ互いに隔てていました。とりわけ私の母は、広範囲にわたる知り合いやコネクションへと導くかもしれないあらゆる交際を避けていましたので。私たちはお互いへとたどり着くためには、どちらも実際には厳しい障害と戦わなければならなかったのです。この希有で愛すべき女性について非常に多くの魅力的で注目値することがらを、私はお話したく思いますし、またお話できるのですが、紙面が尽きてまいりましたので、次の手紙まで何も言わないことにいたします。

ミュンスター城における当時の社交は、興味を起こさせないものではなかったはずだが、ミンナ・フォン・ティールマンと彼女のサークルについての詳しい描写を含んでいるドロステの手紙は残っていないので、残念ながら、フォン・ティールマン夫人の住居における、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフとさまざまな人との具体的な出会いについては殆ど何も知り得ない。フォン・ティールマン夫妻の客には、多くの著名な人物が数えられる。この知人―友人サークルはたぶん、彼らの親しくしていた重要な州長官ルートヴィッヒ・フォン・ヴィンケ男爵とその賢明な妻エレオノーレのサークルとも重なり合うであろう。ここで名を挙げられる人物には、プロイセンの皇太子フリードリッヒ・ヴィルヘルムIV世、そしてナポレオンによってミュンスター司教に任命され、しかもフォム・シュタイン男爵と親しかったフェルディナント・アウグスト・フォン・シュピーゲル・ツーム・デーゼンベルク伯爵(一八二五年以来ケルンの司教)、

ダム・ミュラーと友人であった。フォン・ティールマン夫人はしかしメランコリーな性質も持っていた。一八一四年の二月以来、彼女は一定の間隔をおいて七、八年ごとに再発する精神の病に苦しんでいたが、そうしながらも一八三〇年代までは繰り返し回復していた。一八一五年以来ティールマン家の人々はミュンスターに住んだ。彼らはシュラウンによって建てられた城の左翼に居を構えていたが、反対の翼には州長官フォン・ヴィンケの一家が住んでいた。

アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは一八一七年の三月にミュンスターで、ハイドンの『天地創造』が上演された後、全く偶然にアードルフ・フォン・ティールマンと話をする機会を持った。一八一七年の八月にはすでに、ティールマン家一同によるヒュルスホッフ館の訪問のあったことが、裏付けられている。アネットとジェニーのフォン・ドロステーヒュルスホッフの姉妹もまた、この時以来ミュンスター城のティールマン家に招待され歓迎された。ヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンの成人した娘の中で最年長のユーリエ（一八〇六年生まれ）は、かつてノヴァーリスの婚約者で今は亡き人となっている叔母にちなんでそう名づけられているのだが、ジェニー及びアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフよりもほぼ十才若かった。フォン・ティールマン夫人の愛すべき未婚の妹であるカロリーネ・フォン・シャルパンティエは、才能ある画家であり、おそらく当時はすでにティールマン家の家政において病気がちの姉をつねに支えて生きていたであろうが、この画家からアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは絹布画を習った。ドロステのヴィルヘルミーネ（「ミンナ」）・フォン・ティールマンに対する友情は、時の経過とともに二十五才の年齢差が予想させるものよりも親密になっていった。このことは若きドロステーヒュルスホッフの魅力と人柄について雄弁に物語っている。

アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは、「ティールマン將軍夫人」（彼女はいつも「ティールマン」と書かず「ティールマン」と書いた）、「我らが総督の夫人」を、一八一九年二月八日付けのアントン・マティアス・シュプリック



ネ・フォン・テイルマン(一七七一—一八四二)との出会いであった。彼女は旧姓をシャルパンティエといい、ミュンスター第七軍団の司令官(將軍)の妻であった。教養の高いヨーハン・アードルフ・フォン・テイルマン男爵(一七六五—一八二四)は、市民階級の出身でありながら、軍隊における才能と努力と勇氣によって出世し、一八一二年に男爵の地位にまで上ったのであるが、ザクセンの將軍としては初めはナポレオンの崇拜者であった。ロシア遠征を経験して目を覚ましたテイルマンは、一八一三年初め、ザクセン王を解放戦争において反ナポレオンの同盟国側に加わらせようと努めたが失敗し、この試みが挫折した後、自ら同盟軍の陣営に移った。一八一五年以来プロイセンで働きながら、テイルマンの軍はリニイとワウルでめざましい働きを遂げ、間接的にはあるが、ベルアリアンスないしワールローの戦闘に決着をつけるのに貢献した。

彼に劣らず興味を引くのは、その妻、旧姓フォン・シャルパンティエのヴィルヘルミーネであった。彼女とテイルマンは一七九一年に結婚した。たぶんドレスデンで彼の親しくしていたケルナー家だがいに知り合ったのであろう。彼女は一七七二年に、鉾山官にしてのちに鉾山統監となり鉾山大学の教授であったヨーハン・フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・シャルパンティエ(一七三八—一八〇五、一七八四年に貴族に叙される)の娘として、フライブルクに生まれた。両親の家では活発な社交的、文芸的生活が支配的であった。彼女の夫もまたケルナー一家や、シラーとノヴァーリスと親しくつき合い、彼らと興味を分かち合っていた。彼を通して詩人ノヴァーリスがシャルパンティエ家に紹介され、この家でノヴァーリスは翌年、この家の末娘ユーリエ(一七七六—一八一二)と婚約した。

ヴィルヘルミーネ・フォン・テイルマン自身がいわばロマン主義の化身であった。彼女はノヴァーリスと同年齢であり、ラーエル・レーヴィン・ファルンハーゲンとほぼ同年齢であった。彼女は機知に富み親切であった。彼女と夫は社交的で、ケルナー家やザイデマン家などのドレスデンのサロンに出入りし、ハインリッヒ・フォン・クライストやアー

このような詩で言及されているサロンは、本来の「文芸サロン」ではなく、上品な居間であった——しかしこの嘲りは間接的に文芸サロンにも妥当する。文芸サロンでも(サロンニエールのあらゆる努力にもかかわらず)、陰口と悪意という罍を遠ざけることには必ずしも成功しなかった。

ドロステが親類の関係から出入りしていた社交的—文芸的サークル(たとえばベーケンドルフのロマン主義者サークル)は、一人の女性の回りに集まった要求の高い文芸的社交会として定義されているような、狭い意味でのサロンの領域に属するものではない。注目に値するのは、ドロステが、親類の関わりという有利な条件を持たずに、自発的に始めかつ深めていった関係の中では、まさにサロン世界の女性との友情が最も抜きん出ているということである。そうなるのは偶然ではないように思われる。たいていの場合、幅広い交際やあるいは独特の文芸的—ジャーナリズム的活動とさえも結びついていた文芸サロンを運営することは、十九世紀はじめの才能ある教養の高い女性にとっては、自分たちの精神的創造性を賭けるためのわずかなチャンスの一つであったのである。そのような女性たちが、当時の文芸お茶会(ティーテーブル)に座っていた自惚れの強い似非教養人という多数派には属さない、真に教養のある愛すべき女性である限り、ドロステは彼女たちに魅きつけられた。サロンニエールとの友情は、ドロステにとって、サロンで快適でいられる第一の必要条件だったのである。

ドロステのそのようなサロンニエールとの友情を三つ採り上げてゆこう。ヴィルヘルミーネ・フォン・ティールマンとの友情、ジビュレ・メルテンス—シャーフハウゼンとの友情(及びこの人の仲立ちによるアデーレ・シヨーペンハウアーとの友情)、最後に、結婚する前はフォン・ホーエンハウゼン男爵令嬢であったエリーゼ・リューディガーとの友情である。

若きアネット・フォン・ドロステ—ヒュルスホッフがサロン世界と初めて自立的に持った関わりは、ヴィルヘルミー

ああ、私たちのホストたちは上品でした、みんな揃って上品な方々ではありました、谷間がたそがれに沈んだあと、

いたわりが居眠りを始め、

ここそこで針がちくちくと刺し、

それからもつと鋭くメスがぐさりとやり、

それから清潔なカテーテルが

去った男の弱点に滑り込んでゆきました。

しかしまた客たちも、ナイーヴに自惚れていると、折りに触れ、ドロステによって、イローニッシュに朗らかにルーペの下に引き出される。たとえば彼女は『最高の政治』という詩のなかで、ある若い紳士にひとりごとを言わせている。

人(男)はご婦人たちの気に入りたいと思うものです、

——風采が悪くない場合はとりわけ、——

サロンに詣でたとき私は

茶目っ気たっぷりに入っていくながら、出てくるときは呆然としていました。

これらの女性たちの鋭い観察の才能は、いわゆる「上品な社交界」についてのあらゆる幻想を彼女たちから取り去っていた。彼女たちは、多くの家々が持っている社交上の陳腐さと偽善的な儀礼的リチュアルを見透かしており、客が背を向けるや否や、友愛的な美辞麗句が、あつという間に悪口と邪悪な中傷に変貌することを知っていたのだ。ドロステは『客の権利』という詩のなかで、この種の社交を実に辛辣な筆致で描写しているので、読む者はおもわず、彼女と同年生まれのハインリッヒ・ハイネの類似の表現のことを考えざるを得ないほどである。

私はある美しい家において

そこでは大切な客のようだった、

ご婦人たちはほとんどミュージズのように

犬でさえも才気に富んでいるように見えた、

竜涎香の薫りに動かされた空気は

溶けたファンタジーのように漂い、

カーテンが動けば

さらさらという音はポエジーだった。

幻想破壊が開始されるのは、「私」とは別の、初めは褒めたたえられ機嫌をとってもらっていた客（決して「ミュージズ」ではなく、一人の感じの良い人だった）が旅だったあと、みんなが容赦なく彼を酷評するときである。イローニッシュにも次のようにいわれる。

ちの小さなサークルだけが、彼女を訪問し、彼女に訪問されるという特典を享受できた「……」と書いている。しかしこれに加えてリューデイガーは、ドロステはそれにも拘らず並外れた社交的才能を持っていて、「彼女の表現能力は、人を驚かすようなことについて口頭で物語るときに、はっきりと姿を見せた。ほとばしる機知、生活からの滑稽なスケッチ、適切な判断とユーモアに満ちた心理的描写は、彼女のお話を、言うに言われぬほど魅力的で薬味のきいたものにした」と述べている。

議論をここまで進めたことにより、我々は本論のテーマの第二の部分、すなわちアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフの社交的環境への関わり、特に親しい男女の友人たちの小さなサークルへの関わりという事柄に到達したことになる。これらの女性の友人たちの幾人かはサロンを営んでいて、そこにドロステもときおり現れた。しかしこの詩人にとっては、客たちとの出会いよりも、つねにサロンニエルとの個人的な関係の方が重要であった。なぜかといえば、文芸サロンが有する、伝統豊かで、要求の高い形式のなかにあっても、社交は、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフやラーエル・ファルンハーゲンのような高い才能のある女性にとっては、問題がないわけではなかったからである。そもそも極めて重要なドイツ人サロンニエルであるラーエル・ファルンハーゲンでさえも、しばしばサロンの日常の凡庸さに欲求不満を感じた。そしてそのサロンのきわめて輝かしい時期にあってさえも、自分のサロンにおいては、全ての客から返してもらったものを全て合わせた分よりも、もっと多くのものを与えよう、という気持ちが彼女から去らなかつたのである。ジェイン・オースティンとアネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフ(その他の点では会話の輝かしいパートナーをつとめることのできる二人)においては、このことはもっと際だっている。彼女たちは社交上の駆り立てを恐れた——人怖じしてというよりも社交上のくだらないことがらに対する嫌悪感から。この撤退性の最も顕著であったのは、エミリー・ブロンテであった。彼女はほとんど隠者のような表情を見せていた。

響を考へることなど不可能であった。「……」あらゆる個性そのものは、ある種の関心を彼女に注ぎ込んだ。それというのも彼女がそれらを自分の観察の対象にしたからである。

ドロステについてもこれときわめて類似した性格付けを、クリストフ・ベルンハルト・シュリューターが彼女のための追悼文で行っている。

その熟考へ向かい、時にはそれどころか思い煩いにまで傾く真剣な精神に駆り立てられて、彼女は、自然や人間生活についての観察を、風俗や、人の心の繊細でさまざまに絡み合った動きについての観察を、およびそれらについての分析的な考察の結果を、ポエジーに包み込んで持続的な表現に変えた。彼女の中では稀なことに、あらゆる年代、あらゆる人生の時期、あらゆる地位、階級、職業、あらゆる状況にある人間の状態に対して、感情豊かに親密に共感できる心と、絡まり纏れた状況を分析して解きほぐし、明解に見透かして理解し、完璧に判断できる並外れた才能が、一つになっていた。彼女はこの才能をのちにほとんど情熱にまで鍛え上げた、そして彼女の心理的な解剖のメスの前では、安全なものは何もなかった。

ラーエル・ファルンハーゲン自ら、その社交上の成功について、「私は限りなく社交界を愛していますし、これまでもそうでした。そして自分がそのために生まれ、自然(天性)によって定められ、武装させられていることを全く確信しています」と表現している。ドロステは社交界を「限りなく」愛するとは主張してはいない。エリーゼ・リューディガーは彼女について、「社交的な交際をしようとする者にとってはおねに、彼女はほとんど近づき難い存在だった。選ばれた人た

る。ジェイン・オースティンはある時ロンドンで、有名なフランスの作家にしてサロニエールのシュタール夫人に目見えてたぶん知り合いになれる機会があったとき、拒絶の意思表示をした。アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフもおそらく同様のことをしたであろう。

ラーエル・ファルンハーゲンは、大きな社交界の中心に数十年間も立っており、また言語能力に関しても、ドロステとは違って、ただ口頭や手紙での会話においてのみ使用し、文学のテキストには用いなかった。それゆえドロステと彼女の相似性については、ドロステと二人のイギリス人との場合に比べて、一見こじつけのように見えるかもしれない。しかし人生に対する精神の基本姿勢、独自性と自発性という点では、二人の女性は非常に似ていたのである。二人とも「アウトサイダー」であった。二人とも表面的には孤立していた。ラーエル・ファルンハーゲンはユダヤ人として、ドロステは田舎に住むカトリック貴族の、未婚の令嬢としての役割によって、表面的に二人はその役割をある程度までは受け容れたが——内面的には早くにまわりの世界から自由になっていたのであった。

彼女たちは自立した精神であった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはラーエル・ファルンハーゲンについて次のように書いた。

人々が彼女を訪問したがったのは、単に彼女がきわめて愛すべき人柄の人であったからというにとどまらず、ほぼ確実に次のことを当てにできたからである。すなわち彼女のもとを去るときには、さらに(そのあとも)真剣にかつしばしば深く考えるべき、素材をもたらしてくるもの、あるいは感情をいきいきと刺激してくれるものを、必ずや彼女から聞いて持ち帰ることができるということを、当てにできたのだ。「……」彼女の全ての思考には、そして感性の形式にさえも、見まごうことなき独創性が刻み込まれていたので、そこに何らかの重要な他者の影

て、明晰で簡にして要を得た言語表現の、卓越した能力を意のままに用いた。ジェイン・オースティンは、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフが生まれた一七九七年に、『高慢と偏見』の第一稿を書き終え、『分別と多感』を書き始めていた——両者とも社会小説、発展小説の中では第一級の作品である。ジェイン・オースティンは、『高慢と偏見』のなかで、この小説の機知に富んだ主人公であるエリザベス・ベネットに次のように説明させている。彼女(エリザベス)は決して善良なものを批判するつもりはなく、ただ愚かなものを茶化すだけであると。「私は決して賢明なものや善良なものを嘲笑することを望んではいけません。馬鹿げていてナンセンスなこと、気まぐれで矛盾したことが、私を面白がらせます。そのことは認めます。私はできる時はいつもそれらをあざ笑うのです」と。

アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフの手紙、朗らかな詩や散文作品、ならびに未完の小説『レトヴィーナ』のサロンのくだりにおいて、我々は同様の精神的態度に出会う。エリーゼ・リューディガーはドロステについて次のように書いている。「きわめて晴朗な風俗画の中から、彼女はユーモアによって、強い感受性と鋭い悟性のこの産物、女性の稀にみる所有物を手に入れた。すなわち心情の領域への、彼女が見事に究明することのできた魂の深層への、正当な(移行)通路を」と。

ドロステがジェイン・オースティンを知っており、おそらく満足さえして読んでいたであろうということは、老詩人ヘンリエッテ・フォン・ホーエンハウゼンが、アネット・フォン・ドロステの喜劇『ペルデュー』の中で、「古きよき時代のブルー・ストッキング、ヨハンナ・フォン・アウステン」という名のもとに(その他の点ではドロステ自身の特徴を備えて)登場することによっても証明される。ドロステ自身とジェイン・オースティンは、とりわけ社会的、社交的生活に關する鋭い観察と分析という点において、肩を並べる。しかしまさに鋭くものを見たがゆえに、二人は社会的なごたごたを恐れはばかり、むしろ善良で友愛的な(大きな枠や小さな枠の中での)社交に、満足と静かな楽しみを抱いたのであ



いた。彼女たちはすべて、エリーゼ・フォン・ホーエンハウゼン(旧姓フォン・オックス)がドロステに関して公式化したごとく、「自立と独立の精神」に規定されていた。彼女たちはすべて——一八世紀のソクラテス的な意味で——認識を得ようとした。自己についての認識、人間についての認識、神についての認識を。女性性を否定することはなかったが、しかし(今日求められているようには)明確な言葉で女性として自己を実現しようとするのではなく、むしろ人間として自己を完全なものにしようと努力したのである。(高い意味でも一般的な意味でも)人間となること(受肉)が彼女たちのテーマであった。ラーエル・ファルンハーゲンのユダヤの出自にとっても、アネッテ・フォン・ドロステーヒュルスホッフの貴族的、カトリック的の出自にとっても同じことが妥当する。両者ともそれを否定せず、人間存在の理想を自己において実現するために、それを自分たちの出発点たる歴史的個人的規定として受け容れた。彼女たちのそのような姿勢を認めようとはせず、非難がましくも「男のような」精神という咎で責めたのは、ステロ版に捕らわれた当時の(単に男性の世界に限らぬ)世界であった。この間違った判断は残念ながら——逆の兆候を伴っていようとも——今日のインタープレイタツイオーンの中にまで影響を残し働き続けている。

上述の四人の女性は、隣人(同胞)とその弱点についての、鋭い観察者であり分析者であった。彼女たちは(広い理念的な意味での)モラリストであり、教育的な意図を持っていた。社会的なクリシェーとリチュアル、偽善と隠された悪意、愚昧と傲慢は、彼女たちの前では足場をぐらつかせることになった。ユーモアたっぷり、あるいはイローニッシュに、あるいは辛辣に——その場合に依じて——それらは仮面を剥がされ、鞭打たれた。実在と見せかけを区別すること、真実と真正さ、自然と人間性が彼女たちの関心事であった。彼女たちの側にはいかなる術学性もなければ、おつに澄ますところもなかった。彼女たちはオープンであり、自発的であって、いきいきとした瞬間に没頭した。そしてしばしばいたずら好きであった。偉大な風刺家ジョナサン・スウィフトを四人ともたぶん読んでいたであろう。彼女たちはすべ

に成立する、目に見えぬ観念的な共同体と関連させることにより、それからもうひとつ、女性の友人とそのサロンへの彼女の実際との関係を顧慮することにより。

諸々の比較を行いながら展望を持つとする識者にとっては、ドロステはその時代に必ずしも孤立していたわけではなく、時代を代表する一人であったし、今もそうであるのだ。彼女には精神の兄弟と姉妹がいた。兄弟に関しては、私は少なくとも三人の名前を挙げたい。すなわち、詩人のハインリッヒ・フォン・クライスト、作家にして作曲家のE.T.A.ホフマン、画家のカスパール・ダーヴィット・フリードリッヒである。三人ともドロステよりほぼ四分の一世紀年上で、クライストは一七七七年、ホフマンは一七七六年、フリードリッヒは一七七四年に生まれている。精神の姉妹も存在した。アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフの作品には、イギリスの作家ジェイン・オースティンとエミリー・ブロンテとのアナロギーが発見される。さらなるアナロギーとして、偉大なサロニエール、ラーエル・レーヴィン・ファルンハーゲンを付け加えよう。ラーエル・ファルンハーゲンもジェイン・オースティンもドロステより約一世代年上であった。ラーエル・ファルンハーゲンは一七七一年の生まれであり（一八三三年に死亡）、ジェイン・オースティンは一七七五年に生まれ、すでに一八一七年に死んでいる。一方、エミリー・ブロンテは一八一八年の生まれで、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフよりも二十才若い、早くも一八四八年、ドロステと同じ年に、三十才で死んだ。三世代に亘るこのアナロギーの枠は——中央にドロステを置いているのだが——狭い意味でも広い意味でも時代を性格付けるために、そしてドロステを位置づけ性格づけるために重要である。この観念的な領域の場合と同様に、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフの実際の社交上の関係と友情を描くときにも、我々はふたたび、世代間の幅広く並んだ三和音に、かなり年上の女性とかなり年下の女性に対する彼女のオープンな姿勢に、出会うことになる。

上掲の四人の女性にはすべて啓蒙主義と批判の精神、ならびに十八世紀と十九世紀はじめの心情文化が刻み込まれて

ヨーロッパ全体は再び革命的騷擾の中にあつたのである。

個人としての人間が政治的、法的、市民的に参加するという傾向と密接に結びついているのは、精神と心情を自由に展開させようとする努力、すなわち、個人的なものを普遍的なものへと無限に接近させることによって、人格を形成し向上させようとする努力であつた。個人によるこの精神的、心情的参加の本質的な要素は、親和性、親しい魂の自由な連合、精神における「自由、平等、友愛」であり、生まれと階級によるあらゆる制限を超越したものであつた。

十八世紀後半と十九世紀はじめの数十年間における、この精神的、心情的参加の諸傾向、それは、政治的参加の運動とは違って、比較的静かに内面的に進行したのではあるが、この諸傾向の性格付けを行ったことにより、我々はすでに、きわめて抽象的なやりかたではあつても、アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフの本質を捉えたことになつてゐるのである。逆に言えば、偉大で天才的で独創的な詩人アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは、時代精神が有している、未来を指し示す諸傾向に心底から満たされ、それを刻印されていたということである。そればかりか、彼女は(後期)ロマン主義精神の代表的人物、象徴的人物、鏡像であつたし、今もそうである。彼女がその時代に――選ばれた友人たちの小さなサークル以外では――無視されたり低く評価されたり誤解されたりし続けたということ、それどころか、時には、小柄で病弱でしかし頭が良く批判的で強烈な印象を与える女性であつたがゆえに――とにかく普通の女性と異なっていたがゆえに――一種の巫女(見霊者)や魔女として怖れられさえしたということは、上述したことを反駁するよりも証明することに役立つであらう。

アネット・フォン・ドロステーヒュルスホッフは孤独だつた。彼女もそのことを知っていたが、小さな災いとして耐えていた。彼女は同時代人よりも後世に理解されることを望んだ。しかし我々は以下、二重の観点から、彼女のこの孤独(孤立)を当時生きていた人々の間で相対化しなければならぬ。すなわち、彼女の時代の志を同じくする人々との間

# ビーダーマイアー・フォアメルツ時代の文芸サロン

―アネッテ・フォン・ドロステー・ヒュルスホッフの関わりと隔たり―

ペトラ・ドリッカー

岩 元 修 訳

男爵令嬢アネッテ・フォン・ドロステー・ヒュルスホッフが一七九七年一月十二日にヒュルスホッフ城で誕生したときには、まだ、ドイツ国民の(老いたる)神聖ローマ帝国、およびその階級社会、その封建的貴族制度、そしてオットーによる帝国教会制のなごりが存在していた。それに対してフランスでは一七八九年以来、「自由、平等、友愛」の合い言葉のもと、革命が、普遍的な人権と市民権を新しい国家秩序と社会秩序の基盤となし、個々の市民の政治的参加を宣言していた。ナポレオン・ボナパルトはまさにそのころ上部イタリアへの進軍を勝利の内に終了し(一七九七年一月十四日リヴォリの勝利)、それにより將軍としての名声を確立して、諸国家からなるヨーロッパ世界を根本的に変えることに着手した(第一段階は一七九七年十月十七日のカンポ・フォルミオの講和だった)。一八一五年に革命とナポレオンの時代がさしあたり終了し、復古とビーダーマイアーの時代が始まったときには、アネッテ・フォン・ドロステー・ヒュルスホッフは十八才だった。この時代、一世代、ほぼ三十年間続いた。ドロステが一八四八年五月に亡くなったときには、